

ウイグル語写本・大英博物館蔵 Or. 8212 (109) について

庄垣内 正弘

はじめに

チュルク語研究の発展においてウイグル語の果してきた役割は大きい。ウイグル語研究は今世紀初頭から現在まで約4分の3世紀の長きに及んでいるが、なお翻訳されていない資料或いは未整理の資料が多く残っている。それらを翻訳、整理することによってウイグル語の体系を更に明確にできる可能性は十分にある。ここに紹介するウイグル文テキストもその点からみて役に立つ資料と考えられる。以下このテキストの体裁、奥書、その内容及び言語上の特徴について簡単に紹介してみたい。

I. 本写本の体裁と奥書

本写本は1907年に英国の Aurel Stein の手によって敦煌の千仏洞から将来されたもので、文献番号 Or. 8212(109)⁽¹⁾ を付されて大英博物館に保存されている。その体裁については Serindia II に詳しいが、写真本で見える限りでは63葉126頁からなり、表紙は欠けるが、かなり良い状態で保存されている。1aから46aまでは各頁11行づつ統一を保って書かれているが、それ以後は11行乃至15行の間でまちまちに書かれていて、全部は1,429行からなっている。字体は *cursive* のウイグル文字で蒙古語の字体によく似ている。巻末或いは章末と思える2箇所漢字で「善哉善哉」(46b)と「善哉了也娑土了也」(58b)と書かれ、文末に1箇所「了也」(55b)の漢語がみられるほか、本文中にもウイグル語と混って「七」の字が1箇所現われる。

muntay osuyluy 七 yeti toquz ellig künketeği turur. (5b-1)
斯く の 如き 7 は 49 日にまで 留まる

この「yeti (7)」は中有に 関する 1つの単位を 意味するものであるが、この yeti と重複して漢字の「七」が書き加えられている。

このほかに46aと46bに3個の不可解な文字が出てくる。46aの「𐰽」については羽田亨博士が「了也」の草体であると説いておられるが、残りの2つは一見⁽³⁾

したところ梵字に似たものである。それらが何を意味したかはここでは決定し難い。

1913年に E. D. Ross が46 b の奥書から本写本の書写年代を西暦1350年とし、⁽⁴⁾
次いで羽田博士が1920年に Serindia I にこの奥書の翻訳を発表された。⁽⁵⁾ その後
1925年にその翻訳を修正され次のようにして我が国で発表された。⁽⁶⁾

çi cing onunč i bars yil altinč ai tört yangi ya üc lükëük baliy liy
至 正 第十 虎 年 第六 月 四 新(日) ニ ヲ チ ユ リ ユ ク チ ユ ク 城 ノ 人
Xulut män yangi boşyutči sariy tutung asdai oyul ning lingči si üzä bitidim
クルト 余 新 学 ノ 人 サリク 都統ガ アスタイ 王子(?) ノ 令旨 ニ ヨリ 書写セリ
sadu ädgü
善哉(sādhu)善哉

この至正十年というのは元の至正十年であって A. D. Ross のいう1350年に相当する。

しかし残念なことに本写本の内容は、その後この46 b の奥書以外発表されていない。

ところで、いま挙げた奥書は文の切れ目を表わすマークの後に行をかえて書かれていて奥書としてまとまった体裁を示しているが、実際にはその前のところ即ち46a-3にも一応奥書と考えた方がよい文章がある。

tört törlüg keziklig yolča uduzmaqlıy teriñ nomlu y T'MNG'Ĝ-iy çoylu y
4 種の 次第を有する 道として 導く 深い 法をもった (律儀)を 威
yalinli y ulu y bayşı naropanıñ kentü ayızintın nomlayu yarlıqamış qulyaqıtın
光ある 大 禪師 ナーロッパが 自らの 口から 唱え 宣うた 耳から
qulyaqqa ayızıtın ayızqa ulay sapıy bolmış dantıra erür. şakiliy toyın ulu y
耳へ 口から 口へ 無限のものとなった タントラである。釈迦の 僧 大
bayşı ÇÜĜ ÇU B'Ĝ-liy darma tvači čoski irgemesen nomlu y tuuy atli y bayşı
禪師(チョグ・チュ・バグ)の 法 幢 といふ 禪師⁽⁸⁾
üze yaratmış erür.
が 作成した のである。

çü tübsüz teriñ bu dantıranıñ tüpütcesin körüp tımge biligsiz tümeninç
甚 深 この タントラの チベット語を 見て 無能 無知 愚(万番目)の
qulut qamilliy arya açarı tükellig bilge istonpa bayşiniñ boşu y yarlıy
クルトが カミル(哈密)の 尊者 阿闍梨 全 知の イストンパ 禪師の 許 可
üze evirü aytaru tegintim. (46a-3~46b-5)
のもとに 翻 訳するに 至った

この文章の後に羽田博士の翻訳された文が続くのである。

これによればクルト (Xulut, Qulut) は単に書写した人ではなく、チベット語から直接これを翻訳した人物であったということが理解される。またこのチベット語の原典が「法幢」(恐らく Spyil-bu-pa「笈補巴」)という人物によって作成されたところのナーロッパ口伝のタントラであるという事実も知ることができる。

なおこの奥書については次章IIで再検討したい。

ナーロッパ (Nā-ro-pa A.D. 1016~1100) はインド密教のタントラ作者であり、

その著わした多くのタントラは主にチベットに伝承された。勿論チベットからウイグルに受け継がれた可能性は十分に考えられるが、いままでウイグル語訳されたナローパのタントラについての研究はなされていない。

ここに紹介するテキストは表題を欠いているが、筆者はその内容の一部が著名なタントラの1つである「吉祥輪律儀 (Śri-cakrasaṃvara)」に所属するものであると決定したい。

しかし、本写本に書かれている「吉祥輪律儀の根本タントラにある第31巻」がチベット語原典の何に相当するかは今のところ発見できなかつた。⁽⁹⁾

II. 内 容

高度の密教々理の内容をもつこのタントラテキストを完全な形に翻訳する仕事は、原典、或いは同一原典からウイグル語以外の言語に翻訳されたテキストを発見できない現在、密教学的知識をもたない筆者にとっては至難の業といえる。実際筆者による本写本の日本語訳は今のところ不完全な逐語訳の域を出ない。それ故この章では主に内容構成の概略とそれに関連する若干の個所を紹介するにとどめたい。

奥書のあと更に34頁にわたって文章が続いているが、一応この部分を奥書の適用範囲外として取り扱い、後半部は又58bの「善哉了也娑土了也」という漢文を境界として2つに分割できるので、本写本は全体として次の3部に分けることができる。

- A 1a~46b
- B 47a~58b
- C 59a~63b

A 1a~46b

本写本の冒頭は

oom suvastı sidam činkertü uluy ertini bayši qutıña yökünür men (1a-1
吉祥に成就した 真実 大 宝 神師の 福に 敬礼する 我れ。

~2)

という章頭を明示する一文に始まる。

この章頭文に始まり奥書に終るAの部分は内容からみて2つの部分に分割できる。その境界の部分にあるウイグル文がこのAの部の内容をよく説明していると思えるのでその一部を下に訳述してみる。

bu erser bodısatvalarnıñ öz köñülinçe toyum tutyuluq yañi erür, tımge
これ が 菩薩らの 精神として 誕生を 得るべき 方法 である。卑しい
ındiriliy tınlaqlarqa eyin kezikçe bişurunup tuyunıyuluq nom tüketi.
根をもった 衆生らへ 順 次に 修得して 覚るべき 法は 完了した。

bu nom ulalmıši uluy vaçir tuttaçitın tilopa naropa marpañ S'NGB'
この 法を 継承したものは 大金剛を 得るものから ティロパ ナローパ マルパから (サンパ)

başşı T'NÇYGB' başşıqa tegi ulalmış erür. ölgülük belgüler bular erür: ün
 禪師 (タンチクバ) 禪師 にまで 継承した のである。死ぬべき 相などは これらである: 声が
 beklenmek töz töpüte buu önmek etözniñ kölige qulyaqnıñ ün köznıñ
 確保されること(?), 頭頂へ 気が 上ること, 体の 影, 耳の 音, 眼の
 küci muntat ulatı belgüler bir tušta yoq bolsar ölürin bilgülik ol.....
 力 これらの 相などが 一時に 無く なれば 死を 知るべし。.....
 töpüteki didim bezek teg üzeligsiz yig üstünki başşınıñ adaqlıy qooş
 頭頂にある 王冠 飾り の如き 最高 至 高の 禪師の 足の 一對の
 linxuasına anıtur men. alqu burxanlarınñ yarlıyın köñüllüg kögüzinte bilmış
 蓮華に 跪拝する我れ。 全 仏の 命を 心を有する その胸に 知覚
 uqmış uluı başşı çoyluı yalınıy naropa başşı kentü ayızın ulayu nomlayu
 した 大禪師 威光ある ナーロッパ 禪師は 自らの 口で 更に 唱え
 yarlıqamış. şiri çakıra sanbaranıñ tüb yiltız dantıra taqı bir qırqınçı tegzinç
 宣うた。 吉祥輪 律儀の 根本 タントラにある 第31 卷
 teki darma mudıra nomluı mudur tamyanıñ tört törlüg keziklerig yol qılıq
 の ダルマ ムドゥラ 法 印 契の 4 種 次第を 道を なして
 bütürmek bışurunmaqlıy nomluı yanıy sözleyin. (11a-6~12a-10)
 成 就すべき 法の 方法を 述べよう。

上掲文中、文脈上より判断して点線までが前半部に属するのである。

前半部 (A¹) の内容を要約すると「生死の中間に位置する中有とそれから再誕生を得る方法に関する説明」の記述である。上に訳述した文の前の半分はその終了を述べている。

これに対して後半部 (A²) は頁数の上から A¹ の 4 倍近くを占めるだけでなく内容的にも A¹ よりまとまっている。即ち上の訳述文中にみられる如く「吉祥輪律儀の根本タントラの第31巻にあるダルマ・ムドゥラ (法印契) の4種次第の成就法」がこの A² の主題である。又、この4種次第とは次のものである。

- 第1 相をもった心界の次第 (belgülig köñül oyuşniñ keziki)
- 第2 修得すべき陀羅尼の次第 (bışurunıyuluq darnılıy keziki)
- 第3 大智を生む大智の次第 (uluı bilge bilig toıyuluq uluı bilge bilig keziki)
- 第4 秘密の次第 (kizleqlignıñ keziki)

文中においてこの4種は切れ目を明示することなく連続して述べられているので各次第がどこで始まりどこで終わっているのかを見つけることは容易ではない。しかし第3次第までは次のように分けることができる。

第1次第12b-4, 第2次第27b-5, 第3次第39a-10。

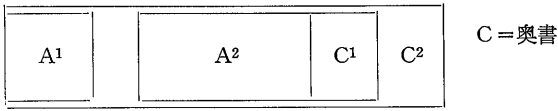
第4次第に関してはこれがどこから始まっているのか定かではないが、次の如き文から判断するとこの次第は第3次第と同一内容のものか、或はそれに内在するものと考えられる。

iřana bilge bilig toıyuluq iřana bilge bilignıñ keziki erser töpükmiş
 智 を 生むべき 智 の 次第 は 極上の
 kizleqlig kezik erür.....tört etöz beş bilge bilig bir tözlig bolmaq
 秘密の 次第 である.....4 身 5 智 1 根をもって なる

vaçira tara vaçir tuttaçï inçip töpükmiş kizleglig kezik erür. muni yëme
 金剛 陀羅 金剛を 持つことは この様な 極上の 秘密の 次第 である。これを また
 kimke kizlegülük erür teşer siravaklarqa pratikabudlarqa kizlegülük
 誰に 隠すべき であるか というなら 声聞達へ 独覚達へ 隠すべき
 erür. ne üçün kizlegülük erür? bir aźunta yëg üstünki maxa mudranıñ
 である。何故 隠すべきか? 1 世界に 至高の 大印の
 sidi bolıyuluq al alday olarta yoq üçün kizleyür. olarnıñ köñil oyuşinta
 成就するべき 策が 彼らに 無い ために 隠す。彼らの 心 界に
 kirmez sīnamaz üçün kizlegülük erür. anıñ töpükmek kizleglig erür. (44
 入らない 試みない(?) ために 秘密にすべき である。それが 極上の 秘密 である。
 b-7~46a-3)

この後に奥書が続き、奥書の冒頭に現われる「4種次第」というのは実はこの4種を指している。(cf. p. 045)

さて、A²の終りが奥書と直結するという事実によって、奥書をもう一度検討し直してみる必要がある。奥書の前半部、不可解な文字「𑖀」までのウイグル文(cf. p. 045)を素直に解釈すると内容上からA²の部分にのみ適応されるものと受けとれる。しかしA¹とA²の境い目には文の切れ目を示すマークがあるが、行をかえて書かれることもなく筆跡も同一人のものであるから、外面的にはこの2つを切り離すことはむずかしい。筆者はこの事実を次の如く解釈したい。即ち、本写本の奥書は2層からできているものであって、「𑖀」までの奥書は元々A²に属するもので、何者かによってA¹とA²が結合され書写されたチベット語のテキストをクルトが翻訳筆記した後、第2の奥書としてそれ以下の部分を書き加えたものと推定できる。それ故Aと奥書の関係は次の如く図示できる。



ところで、A¹の部分にはA²において屢々現われるナーロパからの直接の口伝を示す文は見当たらないが、このA¹の最後に見られる「……大金剛を得るものからティロパ、ナーロパ、マルパから……」(cf. p. 046)から判断すれば一応このA¹もナーロパ系統のタントラであると判断できる。実際A¹の内容の一部には別(13)のナーロパ伝承のチベット語テキストと一致する箇所も見られる。

B 47a~58b

oom suvasti sidam at mañal bolzun! vazirliq başşiniñ adaqlıy qooş
 吉祥に成就した、 幸 あれかし! 金剛をもった 禪師の 足の 一對の
 linxuasına asutay oyuł yükünürmen. (47a-1~3)
 蓮華に アスタイ 王子 我れ敬礼する

の章頭文に始まるこのBの部分は「çantaliniñ altı diyanniñ udizyuluq yañi (旃陀利の6禪定が導く方法?)」という題目のもとに、

naropa başşınıñ altı diyan taqı köñülüg bir uluq qılyu ol. al alday
ナローパ 禪師の 6 禪定 にある 心を 一 大に するべし。 企ては

uçuqtı. (51a-11~51b-1)
終った。

の一文まで、この6禪定の簡単な説明とその「完了した」ということが述べられていたのであるが、各禪定の内容に関してはまとまりがなく、これらをここで紹介することはむずかしい。

しかし、この後51b-1からこの部の終りまで上のものとは別の内容を有する更に5つの禪定についての説明が見られる。この5禪定が上の6禪定と如何なる関係にあるのか定かではないが、上のものに較べてその内容は理解し易い。即ちこの5禪定には次の名称を付けることができる。

第1 心を堅固にすべき禪定 (köñülüg berk qılyuluq diyan)

第2 魔法の如く体を現わす禪定 (yөлvi kömen teg etöz belgürtteci diyan)

第3 夢の禪定 (tül diyan)

第4 明りの禪定 (yaruq diyan)

第5 中有の禪定 (antırabav diyan)

51a-12にナローパの名称が現われるからこのBの部もナローパ伝承のタントラと一応断定できるであろう。

又、この部には1人称で表現される2人の人物が登場する。1人は最初の部分に現われるアスタイ王子である。(cf. p. 048) 別の1人は後半の5禪定中に現われる。

čantaliniñ uduzıyaq bişrunıyuluq kezikin men R'B SUNG torci yıya
旃陀羅の 指環(?)を 修得すべき 次第を 我れ (ラブスング) トルチが 積むに
tegitim. (53b-6~7)
至った。

両者共1人称で書かれているのでこの部の作者とも考えられるが、この短い部分に2人もの作者が存在するのは不自然である。実際アスタイ王子はAの部分でクルトによって書き加えられた奥書の中に現われているので、このBの部がウイグル語で作成されたものでない限り原典に彼の現われる理由がない。又、上のウイグル文だけから(ラブ・スング)トルチを作者と断定することはできないであろう。いずれにしてもこのBの部の内容把握は困難である。

C 59a~63b

この部の始まりは前2部が「oom suvasti sidam.....」という章頭を示す決り文句を戴いていたのに対して次の如くなっている。

čin kertü başşınıñ adaqınta yüküntürmen. (59a-1)
真実 禪師の 足に 我れ敬礼する。

又、このCの部はA. Stein も指摘しているように前2部と較べると乱雑な大きな書体で書かれ、各頁の行数も区々である。しかしこのCの部がナローパ伝承のものか否かは別として「吉祥輪律儀」に属する事実は次の文から明確である。

kim qayu burxan qutı küsüslüg yogaçarılar şiri çakıra sanbara bölükinte
誰か 何処かの 仏福の 望みをもった 瑜伽行者らが 吉祥輪 律儀の 部門で

ÇUDB' tapiy qılayın tēser.....(59a-2~5)
(gcod-pa?)礼拝を しよう というなら……

内容は「礼拝に関する説明」であって 60b-2 からは次の6種の「礼拝」について述べている。

- 第1 陀羅尼の礼拝 (daraniliy tapiy)
- 第2 外の礼拝 (taş tapiy)
- 第3 内の礼拝 (iç tapiy)
- 第4 悦びの礼拝 (ögirttürmeklig tapiy)
- 第5 心において実践する礼拝 (köñül üze bütürgülük tapiy)
- 第6 賞賛を唱える礼拝 (ögiti sözlemeklig tapiy)

だが残念なことに本写本は上の6種の「礼拝」の内の第4番目の途中でと切れ
ている。

III. 言語面での特徴

本写本のウイグル語は書写語としてはむしろ標準的な様相を呈している。それ
故ここでは特筆すべき点のみを掲げたい。

さきに内容からABCの3部に分割したが言語の面からは全く差異が認められ
ない。

1. 音 韻

音素は従来の古代及び中期チュルク語の資料を参考にして、本写本の文字体系
から決定した。又、音素記号//は便宜上本写本に現れる用例のみに使用する。

文字と音素：

先ず /e/ の狭い音素 /e/ を表記するのに /e/ を表わす文字 E (語中では ') が
使用されることもあるが、大体は /i/(i/) を表わす I (語中では Y) が用いられ
る： /erkek/IRG'G 「男子」(6a-2), /ber-/BYR' 「与える」(1b-1), /eşid/
ISYD- 「聞く」(26b-4) ESYD- (5b-6)

/ö/, /ü/ が初頭の /y/ に接続するとき是一般に Ü とならずに U となる：
/yürek/ YUR'G 「心臓」(13b-5), 又 /köñül/ 「心」を表記する場合にも例外的
に U を用いる： GUNGUL (3b-4 etc.)

/d/, /t/ は語中、語尾では D, T を混用し、特に /t/ に対しては本来の T より
も D を使用する傾向にある： /tutar/ TUD'R 「捕える」(4b-2), /tülteki/
TÜLD'GY 「夢にある」(1a-7) cf. TÜL-T'GY (1a-5), /et/ ED 「肉」(17b-1),
/it/ ID 「犬」(10b-7)

本文の筆写の誤りを訂正して D を T にしているところがあるから D と T の混用は
(16)
/t/ > /d/ の音韻変化を示すものではなく、文字表記における筆記人の筆癖と考え

るべきである。訂正例：ED→ET /et/ 「肉」(1a-7), UUD→UUT /oot/ 「火」(8b-11) etc.

/q/, /y/ に対しては本来 Q, Ğ の2つの文字で使い分ける, ここでは混用されている：/qač-/ĜĈ-「敗走する」(10a-4), /tamyā/ T'MQ' 「印」(12a-8)

/n/ は無点のNとNの左傍に点を付けたÑによって表記される：/naropa/ 「ナローバ」 N'RUB' (29a-6) Ñ'RUB' (20b-6)

/v/ はVのほかにも Y, U によっても表記される：/vačir/ 「金剛」 V'ČYR (11a-10) YČYR (45b-6), /ratna sanbava/ R'DN'S'NB'U.' 「宝生」(55b-1), /tvači/ 「幢」 TU'ČY (46a-9)

/z/ には語末でZを用いるが語中では常にSによって代用される。又、語中の/s/ と混同を避けるために時に離し書きがおこなわれる：/azlanmaq/ AZ-L'NM'Q 「色情を催すこと」(6a-2) cf. ASL'NM'Q (3a-8), /közünür/ GÜZ-NUR 「見える」(35b-1) cf. GÜSUNUR (3a-8)

/ñ/ は Ñ (又はN) と Y の合成によって作られる：/ñana/ 「智」 İNY'N' (39a-10) İNY'N' (39a-11)

/gh/ は /g/ を示す G と G の右傍に点を付けたĜH によって表記される：/amoghasiđi/ 「不空成就」 AMUG'SYTY (55b-6) AMUGĜH'SYDY (32b-2)

/ž/ は /s/, /š/ を示す S, Š 以外に Z の右傍に2点を付けたŽ によっても表記される：/ažun/ 「世界」 ASUN (5b-2) AŠUN (15a-1) AŽ-UND'GY /ažun-taqi/ 「世界にある」(34a-1)

上に掲げたĜH は他のウイグル語文献にはみられない。又、硬口蓋鼻音の /ñ/, 軟口蓋有声出気閉鎖音の /gh/, 齒茎口蓋有声摩擦音の /ž/ が現われるのはいずれも借用語に限られる。

長母音：

ウイグル語において母音文字の重ね書きによる長母音表記は一般に知られていないが、本写本では若干の単語は大体規則的に長母音表記がなされている：/kiüü/ GUU 「名声」, /yüüz/YUUZ 「顔」, /yüüzlen-/ YUUZ-L'N 「直面する」 cf. /yüz/ 「⁽¹⁷⁾百」, /yüü/ YUU 「汁?」, /uu/ UU 「睡眠」, /uuč/ UUČ 「先」, /uul/ UUL 「足の裏」, /buu/ BUU 「蒸気」, /tüü/ TUU 「毛」, /qooš/ QUUS 「対」, /oot/ UUT UUD UD 「火」, /toosin/ TUUSYN 「野性の」, /tün/ TYYN 「息」 etc.

音素交替：

ウイグル語では母音或いは子音音素の交替は屢々見られるが、この写本でも次の交替例がある。

/a-/~/e-/

/amti/ 「今」(2a-2) ~ /emti/ (12a-10), /ayinč/ 「恐怖」(15-7) ~ /eyinč/,

/artini/「宝」(1a-1)~/ertini/ (59b-5), /aṅrek/「指」(2a-7)~/eṅrek/ (63a-11)

/-i-/~/-u-/~/-φ-/ (zero)

/sumir/「須弥」(40a-9)~/sumur/ (4b-9), /butiq/「枝」(18a-1)~/butuq/ (57a-4), /biširun-/「修得する」(1b-8)~/bišurun-/ (11a-9)~/bišrun-/ (47b-10)

/-b-/~/-v-/

/qabšut/「結合点」(49a-4)~/qavšut/ (49b-8)

/-ŋ-/~/-n-/

/baštīnliḡ/「第1の」(54a-6)~/baštīnliḡ/ (54a-7)

/-s-/~/-z-/

/bars/「虎」(36b-5)~/barz/ (36b-2)

/y-/~/φ-/ (zero)

/yinčge/「薄い」(2b-6)~/inčge/ (2a-10), /yilin-/「付着する」(5a-9)~/ilin-/ (10a-4)

又、次のものは交替例ではないが、初期のウイグル語からの変化形である。

/aṅit-/「敬意をほらう」(12a-3) < eṅit-, /yapīryaq/「葉」(37b-2 etc.) < yapuryaq, /toosin/「野性の」(15a-5) < toosun, /ayraq/「種類」(24b-10 etc.) < ayruq < adruq, /yariṅaq/「人間」(6a-4) < yarıṅaq, /yür/「吹く」(48b-2) < ür-, /yüt/「穴」(39a-2 etc.) < üt etc.

音位転換:

本写本の若干の単語は常に音位転換を起した形で現われる。

/edrem/「徳」(37b-9, 39a-8 etc.) < erdem, /eṅrek/「指」(26a7, 8 63a-11 etc.) < eṅrek, /tīṅraq/「爪」(24a-1 49a-7) < tīṅraq, /yamyur/「雨」(16a-8) < yaymur~/yaymur/ (58a-11)

2. 形態

新しい接尾辞として /-yul/, /-gül/ ⁽¹⁹⁾ がある。これは動詞派生名詞を作る接尾辞 /-yu/, /-gü/ と 3人称単数人称代名詞の /ol/ (ここでは繫辞の役を果す) の複合形式である。動詞語幹に付いて「義務, 必然」を表わす定形動詞を形成する。

/bol-yul/「……なるべし」(7b-6) < bol-yu ol, /qil-yul/「……するべし」(50b-11) < qil-yu ol, /ütün-gül/「祈るべし」(59b-2) < ütün-gü ol, /sözle-gül/「述べるべし」(59b-3 etc.) < sözle-gü ol cf. /sözle-gü ol/ (61a-12) etc.

次のような単語は既知の語幹と接尾辞の結合による珍しい単語形式である。

/bört-üg/「触」(2b-7), /bört-/「触れる」, /töpü-k-/「頂に達する」(44b-7), /töpü/「頂」, /baydaš-ir-/「胡座をかく」(47a-6) /baydaš/「胡座」, /al-tirti/

「下に」(5a-1 22a-8) /ič-tirti/ 「中に」(25b-1) /-tirti/ /-tirti/ は副詞形成の接尾辞である。⁽²⁰⁾

/ölgeysüG/ は疑問を残す単語であるが、次の如き文脈から推測すると「臨終」「仮死」「失神」の訳語を当て得る。

ögsiremište ölgeysüGte ög qarinta turur. (26b-6)
意識を失ったとき (臨終のとき) 母の腹に とどまる。

しかし現在の段階でわかっているチュルク語文法では /-gey/ (未来の定形動詞形成) が接尾辞をとることはないためにこの /-gey/ は特殊な用法と考えたい。/-süG/ は派生名詞形成の /-sük/ か形動詞形成の /-süg/ (必然の未来) と考えられる。

/muntat/ 「ここで」(11b-3) は muntata の末尾の a の欠如した形と推定できる: /-tat/<-ta (loc.)+ -ta (loc.)⁽²¹⁾

3. 借用語

本写本はチベット語からの翻訳であるにもかかわらずチベット語からの借用語としては /tigli/ (21b-10 etc.) 1語しか見当らない。これが Tib. thig-le “semen virile” (チベット密教ではしばしば男女両用される) に該当するということは次の文例から明確である。qaññiñ bir evin tigli ögnüñ bir evin tigli birle ękigü qatılıp etöz bolur. (22a-2) 「父の1つの tigli と母の1つの tigli と2つが混合して身体ができる」, ög ananiñ qizil tigli adaq altıñi küñ tilgen bolur. qañ ataniñ yürün tigli töz tüpüte bir yañıdaqi ay tilgen bolmiş erür. (44a-11) 「母の赤い tigli が足の下の日輪になる, 父の白い tigli が頭頂で1つの形の月輪になったのである」。ウイグル語にチベット語からの普通名詞の借用語がほとんど発見されていない現在, この単語は貴重な存在といえる。⁽²²⁾

この他 /coski irgemesen/ 「法幢」(46a-9) <chos-kyi rgyal-mtshan, /istonpa/ 「導師」(46b-4) <ston-pa の例がみられるがいずれも固有名詞である。

仏教用語はウイグル語に訳しているところもあるが (/uluñ kölüñü/ 「大乘」(29a-7) Skr. mahā-yāna, /aqiylıy/ 「具漏」(33a-8) Skr. sāsrava, /aqiysiz/ 「無漏」(41a-6) Skr. an-āsra, /belgürtme etöz/ 「化身」(23b-2) Skr. nirmāṇa-kāya, /nomluñ etöz/ 「法身」(23b-2) Skr. dharma-kāya, /tüš etöz/ 「報身」(23b-3) Skr. sambhoga-kāya etc.), 大半はサンスクリットを使用している。これは翻訳に際して訳者がチベット語をサンスクリットに還元したためであると考えられる。次に掲げる単語は未だチュルク語辞典に採用されていない。

/amoghasidi/ 「不空成就」(32b-2, 55b-6) <amogha-siddhi, /antırabav/ 「中有」(1a-3 etc.) <antarābhava, /arya/ 「尊者」(46b-3) <ārya, /avaduti/ 「Buddhist tantric」(13b-6 etc.) <avadhüti, /širi čakıra sanbara/ 「吉祥輪律儀」(11b-7 etc.) <śri-cakrasaṃvara, /dantıra/ 「タントラ」(2a-10 etc.) < tantra.

/iñana/「智」(39a-10, 11) < jñāna, /kadyot/「螢」(3a-11, 13a-4) < kha-dyota, /lalana/「左神經」(17b-7 etc.) < lalanā, /rasana/「右神經」(17b-7 etc.) < rasanā, /maxa mudura/「大印」(7b-5 etc.) < mahā-mudrā, /naraka/「奈落」(58b-3) < naraka, /ratna sanbava/「宝生」(30b-6, 55b-1) < ratna-saṃbhava, /suvastī/「妙樂善」(1a-1, 47a-1) < svastī, /vašikaran/「召伏」(37a-4) < vašīkaraṇa, /vačīrapana/「金剛手」(60a-11) < vajra-pāṇi, /takini/「茶枳尼」(60a-11) < ḍākinī, /sarva tatagata/「一切如来」(62b-6) < sarva-tathāgata, /vaīro-čanda/「毘盧遮那」(31a-5) < vairocana, /yogacari/「瑜伽行」(10b-11 etc.) < yogācāra, /košavartī/「俱舍疏」(4b-2) < kośavṛtti etc., /marpa/ (11a-11) < Mar-pa, /tilopa/ (11a-10) < Ti-lo-pa, /naropa/ (11a-11 etc.) < Nā-ro-pa 以上人名。

この他に中国語、ソグド語からの借用語が見られるが、いずれも従来知られているものである。/abita/ (55b-4) < Chin. 阿弥陀, /busi/ (6b-9) < Chin. 布施, /labay/ (33a-11) < Chin. 螺貝, /ažun/「世界」(5b-2) < Sogd. ʾwzn, /didim/「王冠」(12a-1) < Sogd. dydm, /nizvani/「情欲」(35b-11 etc.) < Sogd. nyzβ'ny etc.

4. 数 詞

ウイグル語の数詞がたとえば11を表現するのに1—20, 25を表現するのに5—30のような特異な組み合わせによる算定法をとることは一般に知られている。この方法が初期のウイグル語において徹底していたか否かは明確になってはいないが、14世紀に書かれたこのウイグル語では次の如くである。⁽²³⁾

- | | |
|--------------------------|---------------------------|
| 11 /bir yeğirmi/ (1—20) | 31 /otuz bir/ (30—1) |
| 12 /ëki yeğirmi/ (2—20) | 32 /otuz ëki/, /ëki qırq/ |
| 13 /on üç/ (10—3) | (30—2, 2—40) |
| 14 /on tört/ (10—4) | 34 /otuz tört/ (30—4) |
| 16 /altı yeğirmi/ (6—20) | 38 /otuz sekiz/ (30—8) |
| 24 /tört otuz/ (4—30) | 49 /toquz ellig/ (9—50) |
| 25 /beş otuz/ (5—30) | 62 /altmış ëki/ (60—2) |

32を例外として(/ëki qırq/ は一度だけ現われる), それ以外は常に上の組み合わせで表現されているので恐らくこの時代にはこの算定法をとっていたのであろう。

5. シンタクス

チベット語から翻訳されたために語順に関してはチュルク語本来のものと異なるところはない。特異な構文としては、文末が -yuluq (-gülik) ol., -yu (-gü) ol. に終る例が屢々みられる: aksobi burxan ulušin köreyin teşer köñülig ya üzikte qılıp udiyu ol. 「不動仏の国を見たいというなら心を ya 文字にして眠る

べし」(55a11~12), bu kezikig tünle küntüz üzüksüz tutçı bişrunyuluq ol.
「この次第を昼夜休むことなく修得すべし。」(54a-12~b-1)

以上、本写本をⅠⅡⅢの3章に分けて紹介してきたが、本写本には書き手による若干の誤りがみられるので次に掲げたい。

...ömeक्सиз saqınmaqsız maxa mudra töz UN üç törlüg T'MNĞ'Q birle
.....無思考の 大 印 根 3種の (律儀) と共に
eki yeğirmi törlüg erür. (28a-1)
12 種 である。

UN は /on/ 「10」と転写できるが、文脈から判断すると UN は LUG の誤りであることがわかる: /tözlüg/ 「根をもった」。

...ol oot Y'NY''YU üstün barip...(53b-3)
...その 火が 上へ 行って...

この文の Y'NY''YU の5つ目の文字、(/a/, /e/ を表わす) はLの誤りであつて Y'NYL'YU /yanılayu-/ 「燃えて」となる。

...sekiz uluy bodisatvalar on U'UĞ vaçrapanalar...(60a-10~11)
...8 大菩薩など 10 金剛手など...

U'UĞ は /uluy/ 「大」を表記したもので ULUĞ とすべきである: /on uluy vaçrapanalar/ 「十大金剛手」。

...ekinti taş tapıy üçünç IS tapıy...(60b-4)
...第2は 外の 礼拝, 第3は の礼拝

この IS tapıy は /taş tapıy/ 「外の礼拝」に対する /iç tapıy/ 「内の礼拝」のことである、即ち IS は İÇ の誤りである。etc.

お わ り に

本写本の全部分とはいえないが、その大部分はインドーチベットーウイグルの経路を辿って導入されたナローパ伝承のタントラであるという事実は明白である。かつてウイグル語のテキストにナローパの名称が現われたことはなかったし、タントラとして紹介されたテキストも限られている⁽²⁴⁾。それ故本写本は言語学以外の部門からの研究にも役に立つ資料になると思う。

本写本と共に発掘された「阿毗達磨俱舍論実義疏」(A. Stein 番号の Ch. xix. 001, Ch. xix. 002) が本写本との漢字書体の酷似及び不可解な文字「𑖀」を共有するという点から既に羽田博士によって両者の書写年代に関する近似性が説かれたが、これ以外にも Ch. xxvii. 002 (OR. 8212-108, G. R. Rahmeti によって現代トルコ語に翻訳された) のウイグル文字も本写本と酷似しているし、本写本に現われる「𑖀」以外の2つの不可解な文字がこのテキスト中にみられるということから本写本を含むこれら3者を同時に研究することがこの時代のウイグル語の研究に更に有効的であると考えられる。

脚 注

(1) Aurel Stein が “Serindia” vol. II (1921, Oxford) に掲載した番号は Ch. xix. 003 で

- ある。
- (2) “*Serindia*” vol. II p.925
 - (3) 羽田亨「回鶻訳本安慧の俱舍論実義疏」『白鳥博士還曆記念東洋史論叢』, p.773
 - (4) E. D. Ross “The Caves of Thousand Buddhas” *JRAS* 1913 p.434
 - (5) “*Serindia*” vol. I p. xxiv
 - (6) 羽田 p.767~8
 - (7) この単語は 27b, 28a, 29a にも現われるが, 文脈からみて「律, 律儀」と訳すべきである。
 - (8) darma tvači (dharmadhvaḥa) = čoski irgemesen (<chos-kyi rgyal-mtshan) = nomluḡ tuuy, dharmadhvaḥa に関しては野尻湖クリルタイ (1974. 7. 18) における岡田英弘氏のご指摘によるものである。
 - (9) 北京版西藏大藏經の索引によると, 最も近い題目として「吉祥輪律儀根本恒特羅細疏」(No. 2122) を挙げることができる。又, 吉祥輪律儀のものでナローパの現われるものは「吉祥輪律儀成就法」(No. 2149) がある。
 - (10) Skr. Svasti siddham, 又 G. R. Rahmeti によって現代トルコ語に翻訳された Or. 8212-108 (Ch. xxvii. 002) 中にもこれと同じような文がみられるが特にBの章頭と一致する (cf. p. 14): suvasdı sıdam ađ manggal bolz-un basladı 「*Svasti siddham*, şeref ve saadet içinde bulunsun. Başladı:」 (“*Eski Türk Şiiri*” 1965 Ankara p.84)
 - (11) <Skr. Ti-lo-pa (A.D.988~1069) ナローパの師
 - (12) <Skr. Mar-pa ナローパの教えを継承したチベット密教の禪師
 - (13) ög qaḡ ekigü amranmaq teginmişin körüp aḡa azlanur. erkek toḡsar anasıḡa azlanup atasıḡa öpke köñülü toḡar. tişi toḡsar atasıḡın ayızıḡa kirip anasıḡın qarınında toquz ay on kün turup toḡar. (6a-5~b-1) 「母父二人の交接したのを見てそれに色情を催す。男と生れるなら母に色情して父へ怒りが生れる。女と生れるなら父に色情して母へ怒りが生れる。N’R(?) が生れたなら父の口に入って母の腹に9ヶ月10日宿って生れる。」 “When he has come to a stage where the possibilities of taking birth in various forms dawn upon him and when he sees his prospective parents engaging in coitus and feels hatred towards his father and love for his mother (provided he should be a male, while in the case of a female it would be the other way about) he transforms his mother’s womb into (what is called) Samayasattva residing in his mansion, and himself enters there as Jnanasattva from his father’s mouth, nose, or other part of the body.” (Herbert V. Guenther “*The Life and Thaching of Naropa*” 1963 Oxford p.73)
 - (14) /vačir/ の変種と考えられる。cf. V’Syr vazir (Rahmeti p.106, 但し彼に従えば vaşır)
 - (15) “*Serindia*” vol. II p.925
 - (16) 本写本には 1a~44b にかけて本文の訂正がみられる。これがクルトによるものか或いは別の者の手によるものかは判断できない。
 - (17) G. Clauson は「顔」も「百」も共に長母音 yü: z にしているが, 本写本では前者は長母音でそして後者は常に短母音で表記されている, 即ちこの /-üü-/ : /-ü-/ は音素論的対立を示している。cf. “The Turkish numerals” *JRAS* 1959 p.19~31
 - (18) 「雨」を意味する単語は現代方言ではオスマン, アゼルバイジャン, トルコメンの一部を除いて殆んどが音位転換を起した形の yamḡur を使用している。しかしウイグル語では普通 yaḡmur の形が現われる。
 - (19) A. von Gabain の “*Altürkische Grammatik*” (1950 Leipzig) には行為者を示す名詞形成接尾辞 -ḡul, -ḡül がみられるが, これとは別のものである。tirnägül Mus. 36, 182 「Sammeler」 (tirin- 「sich sammeln」) p.72
 - (20) Gabain には tašitürti 「drussen」, öndürti 「im Osten」などの例がみられる。p. 175
 - (21) Gabain には muntuda, muntada の例がみられる。
 - (22) K. H. Menges は次のような固有名詞の例を掲げている: Isman<Tib. sman 元は「medicine」の意味, Iqıatı<Tib. kjaḡ < rkjaḡ 元は「wild horse」の意味 etc. “*The Turkic Languages and Peoples*” 1968 Wiesbaden p.172
 - (23) 突厥碑文では29までがこの算定法をとり, それを越えると otuz artuḡı bir 31 の如く「プラス」の意味をもった単語 artuḡı が挿入され 1~40 の如くにはならない。一方ウイグルにみられるこの

特殊な算定法は現代方言でも「黄色ウイグル (*sari uyur*)」でなお使用されている。但し29までに限られる：*e. x. pər йыгырма* 「11」、*пешыгырма* 「15」 С.Е.Малов “*Язык жетых уйгуроб*” 1957 Алма-Ата p.178

(24) 筆者の知るところでは W. Bang, A. von Gabain による “*Türkische Turfan-Texte*” V-A SBAW 1931, のみである。

(25) 羽田 p.773~774

東
洋

投稿後、小田寿典氏によって本写本の奥書部分の翻訳が「東洋史研究第三十三卷第一号」(p.97~98)に発表されたことを校正の段階で報告したい。

なお、筆者のものと異なるところも多いので参照されたい。

学
報